

山古志で牛の飼育に従事した女性の語りにみる農村女性の喜びと哀しみ Joy and Sorrow of Rural Women Monologued by Cattlewomen in Yamakoshi Area

坂田寧代
SAKATA Yasuyo

1. 研究の背景と目的

わが国では、男女雇用機会均等法（1985年制定）、男女共同参画社会基本法（1999年制定）など、女性の地位向上が叫ばれて久しく、近年ではジェンダー平等が人口に膾炙している。農業農村工学分野においても土地改良区における女性理事の増加策を背景とし、2023年度の大会講演会において、シンポジウム「土地改良と農業農村工学 どうする男女共同参画」が開催され、活発な議論が交わされた。

本報告では、農業農村工学分野におけるジェンダー平等を検討する一石とすることを目的とし、山古志で肉用牛や闘牛を飼育してきた女性に焦点を当て、彼女らの語りを通して農村女性が歩んできた道のりを辿る。語りの入手は、山古志のすべての肉用牛（大資本企業経営を除く）と闘牛が共同で飼育されている牛舎において、闘牛の給餌・排泄処理作業補助の傍ら共同牛舎（2021年4月）、自宅訪問（2020年8月～2021年4月）において実施した。この期間以外にも自宅訪問での聞き取り結果を含む。対象は、山古志で肉用牛飼育に唯一従事した女性、および、闘牛飼育に携わり闘牛の引き回しを2018年に行った女性（いずれも当時80代）である。

2. 肉用牛の飼育ひとすじ約半世紀の女性

肉用牛飼育に唯一従事した女性 K 氏によると、1962年に山古志村（当時）に小千谷市から嫁いだ。夫は地元の土建会社に勤務する兼業農家だった。K氏は農作業と4人の子育ての傍ら、肉用牛の多頭飼育を1976年から始め、2022年の年頭に廃業に至るまで、50年近く、夫の多少の補助はあったものの女手一つで完遂した。その半生には飼育に熱中する余り、身体を壊したこともあったという。肉用牛のほか、闘牛も飼育していた。

広報やまこし（1986年12月）によると、毎日新聞社の「土に生きる農村の人々の生活体験記録」を公表する「毎日農業記録賞」に、「牛飼いが、私の人生」が「地区入賞」を果たした。また、繁殖牛を含めた30頭規模の肉用牛経営を行い、山古志村の肉用牛飼育者の集まりである「肥育牛生産組合」に参加し、和牛の系統論に関して第一人者と掲載されている。

K氏の語りを以下に示す。

夫は日中は土建業に従事していたため、人工授精の獣医の手伝いは全部自分一人。牛に腹で壁に押し詰められて肋をいためたことがある。牛は嫌なことをされるのが嫌。牛を怒ったってしょうがない。自分が気をつければいい。何十年もやっていると牛の性格がわかってくる。一時は牛に集中しすぎて身体を壊した。農作業も機械化が進んでおらずほとんど手作業だった。池谷集落40軒で唯一耕耘機を入れた。畑仕事や春と秋は田んぼの手伝いに忙しく、子育てそっちのけだった。嫁いってから15年間無我夢中だったため何をやってきたか覚えがない。自分の子どもに「うちの母ちゃんは牛の方が可愛いんだね」と言われたときにはグサッときたよね。「人間は言葉で言えるけど、牛は言葉で言えないんだよ。だか

ら私がよく観察して管理しないとイケないのが牛であって、みんなはしゃべれるじゃん」と返した。繁殖牛が多かったときは反芻の回数を何回噛んだか観察した。20～25回では本調子じゃない、30～35回だと本調子と判断する。観察するのに時間がかかった。調子が悪い牛がいると、「まだ調子悪いか」と牛舎に入るのが億劫になる。(2021年4月16日(金))

3. 闘牛を含め動物に愛情を注いで約半世紀の女性

闘牛飼育に長年携わった女性 M 氏によると、1959年に池谷集落に同集落から嫁いだ。夫は K 氏の夫と同じ地元の土建会社に勤務する兼業農家だった。農作業と4人の子育ての傍ら、闘牛を含め、小動物の飼育を結婚後50年近く行ってきた。長年の功績が山古志闘牛会に認められ、2018年には闘牛場内に入って闘牛の引き回しを行った¹⁾。夫の親戚が「東京芝浦食肉市場」(現、東京都中央卸売市場)で働いていた伝手で、1970年代の闘牛の復活¹⁾の際に闘牛が導入された。また、写真-1の資料に掲載されているように、沖縄本土復帰の1972年12月にコザ市営沖縄観光闘牛場で開催された復帰記念の全日本闘牛大会のために出場させる新潟の牛をコザ市長の求めに応じて肉用牛で出荷するための雄牛(当時は肉質より体格が重視されたため、去勢した雄牛でなくとも出荷できた)を提供した。その雄牛は、陸路を経て東京から出航し、「新潟号」として出場した。M氏の語りを以下に示す。

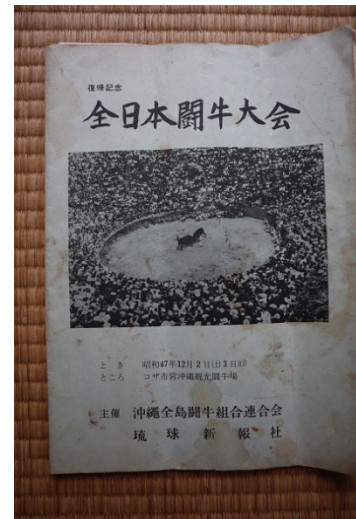


写真-1 「新潟号」掲載資料
(2020年8月12日撮影)

池谷集落では、闘牛場から牛を連れて帰り牛だけ家につないで人は必ず八幡様(鎮守様)に行って御神酒を飲んで反省会をした。どこの牛は良かった、今度はどこの牛と突かせたいと話す。胡瓜、茄子の漬物、枝豆を母ちゃん衆が晩方になると行ってこしらえた。(2021年3月4日(木))

角突きの前のお湯を沸かしてきれいに磨いて連れて行く。綱は麻でつくった。綱をなうのに女の人は力がないので容易じゃない。面綱はなうのに3、4人必要。思いついたとき、天気を見てなった。残飯を切ったりも男衆がする。女衆は大根や茄子の皮や刻んだワラなどを直径1mの大鍋に入れて囲炉裏の自在鉤にかけて餌をつくった。どうしても女の人動かないといけない。(2021年3月28日(日))

隠岐の島の黒牛。結構長く突いた。お父さん、お母さんが隠岐の島から牛を連れてきてお母さんが「ここで可愛がってもらえ」と言って別れるとき牛がポロポロ涙をこぼして可愛そうであった。餌くれする人のことはわかる。車の音も。後ろの方はかゆくても手が回らないので撫でてもらうのを待っていた。(2021年4月19日(月))

4. 山古志で牛の飼育に従事した女性の語りにみる農村女性の喜びと哀しみ

農作業と育児の傍ら、肉用牛や闘牛の飼育に精力を傾けた女性2名の半生からは、動物への深い愛情が読み取れる。令和6年能登半島地震の避難所において炊き出しの役割を求められる女性の疲れが報道されるように、今でも農村では炊き出しは女性に期待されるのが一般的だが、M氏の語りからはむしろ楽しんで行っていた様子もうかがえる。一方、K氏の語りからは身体を壊すほどの過重労働を強いられてきた哀しみも見いだされる。ジェンダー平等や、土地改良区の女性理事登用を進めるうえでは、農村女性を取り巻く環境に一考の余地があると考えられる。

謝辞 JSPS 科研費 JP20K06293, および、令和3年度「女性研究者開花プラン」支援事業の研究助成を受けた。

引用文献 1) 坂田寧代: 山古志の心にふれる, 新潟日報メディアネット(2024)